
月の森と兎の祠

遮断機 内部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の森と兔の祠

【Nコード】

N7167S

【作者名】

遮断機 内部

【あらすじ】

とある片田舎の森で、ある時連続失踪事件が起こる。

その森の中には、一人の少年が閉じ込められていた。

女好きな兄チエスター・クーンと、どこかズレた弟オルガ・クーンは調査に乗り出すが

この話にはBL要素はありませんが、これから書いていく「C・O・COON」シリーズと世界観は同じ、番外編という扱いです。

月はどうしようもなく丸かった。月はどうしようもなく遠かった。空を切り取った夜の下、君は踊る。僕は踊る。

カレらを祀った祠の前。

袖振り、餅つき、兎は跳ねた。

僕は数える、カレらの数を。

盃を傾けるが一つ。餅をつくが二つ。祠を見るが三つ。卓を囲むが四つ。

不意に、陰る、光。

見上げると、突如湧き出でてきた黒雲に月が覆われつつあった。

僕は気づいた。不意に気づいた。

もう行かなきゃと僕は言った。

早く帰らなきゃと僕は思った。

僕は歩きだした。

すると君が呼び止めた。僕は振り返った。

どこへ行くの、と君が訊ねた。

村に帰るんだ、と僕は答えた。

どうして、と君が。

だってきつと心配してるよ、と僕が。

誰が心配するの、と君。

みんなだよ、と僕。

みんなってだあれ？

みんなはみんなさ。村のみんなさ。

心配する人なんていないわ。だってこんなに気持ちのいい夜なんだもの。

僕は踵を返して、獣道に走りこんだ。

君は僕の名前を呼んだ。僕は振り返らなかった。

僕は走り出した。

祠から伸びる月の小道。今は照らされざる月の小道。

ずっと走ってゆけば村があると誰かが言っていた。

走る走る。村に向かって。

月が再び顔を出す前に。

怖い怖い。月に捕まるのが。囚われるのが。

不思議な場所。不思議な広場。不思議な祠。不思議なカレら。

あの夢のような場所に。

何がどうして僕がカレらと一緒にいたのか。カレらが一体何なのか。

僕には何一つ分からなかった。

でも僕は一つだけ分かっていた。

僕は月によってこの森の中に閉じ込められていた。

どういうわけか、その確信だけが頭にあった。

早く帰らなきゃ。早く。早く。

また月に捕まる前に。

「だあから、オレは反対だったんだよさあ？」

生い茂る木々や草花やその他諸々に埋もれるように立つ青年チエスター・クーンは、大袈裟に肩をすくめて遺憾の意を表明してみせた。彼が纏っている白衣には、オナモミやら細かい葉っぱやら得体のしれない自然物がへばりつき、肩下ほどの長さの黒髪には、もはや獣道とすら呼べない道なき道を延々と歩き続けてきた疲れがにじみ出ている。

対する傍らのブレザー姿の青年オルガ・クーンは、涼しげな表情で右肩にシャベルを担ぎ、左手に持った地図を見つめ　そして、目的地までの道を発見したのか、嘆く兄を置き去りに茂みの中へ歩みを進め始めた。ただし、彼の手にしている地図上には何故か大陸や海が存在している。

その圧倒的な存在感を放つ縮尺上の大誤算には全く気付かないまま、チエスターは弟の背中を追いかけつつ、心の内に秘めたる激情を語り始めた。

「大体よお、なんでオレ達がこんな田舎くんたりまで来なきゃならねえんだよさーあ？　人はいねえし道はねえし暑いし足は疲れるし服は汚れるしそれに」

「女の子成分が足りない……！！」

大仰に天を仰いで嘆いている兄をよそに、オルガは何度も世界地図を回転させては首をひねる。

「どこだ、目的地……？」

「なあ、聞いてるか？　聞いてくれてるかよ、おーい？」

「あーうん。聞いてなかった」

「そうかあ……。お前また耳が悪くなったのかあ……。お兄ちゃん

「は心配だぞ？」

「ふーん」

変質的なまでにポジティブかつ過保護すぎる兄の発言には気のない返事で返しつつ、オルガはあくまで真面目に真剣に進むべき道を探した。だが、彼らが辿るべきであった道は四方を見渡してみてもどこにもない。

「恐るべし。原生林……」

オルガは自然への畏怖を言葉で表さざるを得なかった。

とはいえ彼らは地図の入手という第一段階からして既に選択を誤っているのだから、この状況は至極当然の帰結であるのだが。

そんなオルガの苦悩は意にも介さず、チェスターはあくまでマイペースに、だが饒舌に語り始めた。

「しっかしどうしてオルガは女の子の話題になるといつも耳が遠くになってしまふんだろうか、オレが思うに原因不明正体不明の難病奇病じゃないかと思うんだが、このことを顔見知りの女医者に相談してみたら『テメエの頭のご病気はテメエでなんとかしやがれ!』と言われて診察室から蹴りだされてしまったよハッハッハ。あれは多分、オルガの病気が手の打ちようのない不治の病だということをおレに悟らせないように、オレに気を遣つての行動だったんだろっな。まったく俺の周りにはこう素直じゃない奴が多いんだろっな。あ本当に不思議だ」

「……」

「だが安心しろオルガ。オレはその病気の解決策を発見した。オレが思うにお前のその病気はお前が？女の子？というものの良さを十分に十二分に理解できてないが故のものじゃないかと思うんだよ。だから要はオレが女の子の良さについてお前に語ってやればいいのさ！ ははっ我ながら良案妙案ナイスアイデアだな！！ オルガだってオレのありがたあい語りを聞きたいだろう？ ああオーケーオーケー皆まで言うな分かってるさ、聞きたくって仕方ないって顔だな？ そうかならば語ってやろう。まず女の子っていうのはな

……柔らかくて温かいんだ。柔らかくて温かいと何がいったって抱き心地が最高なんだよ。痩せてたほうが美人だと思ってる女の子は多いようだが、オレは少しふくらしてる子のほうが好みかな、ああだからといって痩せた子が嫌いってわけじゃないんだぜ？ オレはどんな女の子であろうと愛を返す義務があるからな、愛される男つてのは辛いぜへっ。次に女の子っていうのはな……訳が分からないんだ。とにかく訳が分からない理解の範疇を超えてやがる、子猫ちゃんのように甘えてくる子もいれば、逆に女王様のように傲慢な子も、気の強い子も気の弱い子も、はたまた不器用な子もいてだな、そう、その全てが愛らしく愛しいんだ！ ああ、彼女達は素晴らしい。オレのこの貧弱な言葉じゃあ表現しきれないほどに素晴らしい！ 彼女達さえいればオレは生きていける！ 彼女達はオレのオアシスだ！！ 女の子万歳万歳ばんざーい！！ だというのにもし、もし？だぞ！ 女の子がオレの周りからいなくなつたとしたら、ああそうさ今みたいな状況さ！ そんなことになつたらっ、そんなことになつたらああああ……！！」

アカデミーの主演男優も顔負けの挙動で、チエスターは大きく仰け反り、絶望に歪んだ顔を両の手で覆い隠した。

「 終わりだ。この世の終わりだ。終焉だ滅亡だ大災害だ世界の破滅だ。おお、神よ！ 終末の時は来たれり！！ これぞ黙示録の日か（アポカリプスなあああウ）っ！？」

血を吐くような声色で全身全霊を込めて絶叫する兄を、地面に突き刺したスコップに凭れつつ半ば諦めたような冷めた目でオルガは見つめていた。

「 ああそうさ、こんなことになつたのも全部アイツのせいさ、アイツめ、あの人でなしめ、帰ったらマジで地獄を見せてやる……」

「 ……？アイツ??？」

その言葉が何を指しているのか理解できなかったのか、オルガは兄の顔を不思議そうに見つめた。

「 なあ考えてもみるよ、オルガ。一体どこの誰のせいでこんな目に

遭つてるのかをよ?」

自分と瓜二つの容貌を持つ兄にそう促され、オルガ「クーンは澁々ながらも回想を開始した。

十

「?神隠し?つて知ってつか、ウジ虫ども?」

不遜。横柄。傲慢。

そんな言葉が似合う男としてのランキングなら、世界でてっぺんを取れると自負する男、クリステイアナ「セガールは、部屋に入つて早々の来訪者たちにいきなりそうやって問いかけた。

当然、そのような突然かつ自分たちには馴染みのない質問に来訪者 チェスターとオルガが答えられるはずもなく、二人はただ限りなく嫌そうな表情をもつてその質問に答えた。

するとクリステイアナは、いかにも見るからに心底残念そうな面持ちで、ただしこれがただの挨拶であると言わんばかりの平静な声色で、

「なんだ虫ども? わざわざ俺が呼びつけてやったつーのに、喜びの声の一つも上げねえのかとりあえずそこに跪いて許しを請え」

「ふざけるクソジジイさつさと死ぬ」

「ここの床汚いのでお断りします」

一人は素直に食いかかり、一人は丁寧にお断りした。

途端、部屋の空気が凍りつく。

「たかだか羽虫風情に?ジジイ?呼ばわりされると、さすがの俺もいささか傷つくんだがな?」

「あーそうですか、それはそれはいませんがねえ訂正しますよこの糞餓鬼野郎」

ちなみにクリステイアナの容姿はどう見ても?ジジイ?と呼ばれるのも?糞餓鬼?と呼ばれるのも相当な違和感があるわけであるが、それはさておき。

怒りを余計に煽りたてるようなチェスターの発言によって、両者の亀裂は決定的なものに。

大理石の机を挟み、バチバチと見えない火花が二人の間に飛び散る。

まさに一触即発。

「まあまあ、お二人とも……」

動く冷戦地帯に果敢にも飛び込んだのは、兄弟に先んじてこの部屋の内にあつた女性だった。腰のあたりまで伸ばした真っ直ぐな黒髪に、体の線がはつきりと分かるほどぴっちりと着込まれた白衣。歳の頃は20代前半ほどか。大きな丸メガネの奥には知性的な、だがどこか弱気な光を宿した灰色の瞳がある。

記憶の底をさらつても全く覚えのない女性の存在にオルガは首を傾げる。おそらくは初対面。でもこんなに若い女性が厄介事専門のこの部署に何故？

だが、チェスターはそんな細かい事は気にしない。

「ああこれは失礼しましたはじめましてこんにちは美しいレディー、あなたの指は白魚のよう、あなたの肌は白磁のよう、可憐なあなたの前ではどんな美しい宝石でも赤面してしまうでしょうね。もしこの後お暇なら一緒にお茶でもいかがですか？ いえむしろ抱き締めさせていただいてもよろしいでしょう」

「よろしくない」

その女性の両手をしっかりと握りしめながら長々と回りくどい世迷言を口走っていた兄の脳天めがけて、オルガは容赦なくスコップを振り下ろした。

加速の付いた金属の一撃を受けたチェスターは、声にならない声を上げながら、床の上を転げ回る。

だが、加害者であるオルガには反省の色は全くうかがえない。むしろ、角ではなく面で殴ったことに対して多少の思いやりを感じてほしいと言わんばかりの表情で兄を一瞥すると、突然の出来事に呆気にとられていた彼女に向き直った。

「すみません、兄が」

「はっ！？ あっいえ、お気になさらず？」

未だ目の前で起きたことが飲み込めず、しどろもどろになりながらも女性は返答する。が、オルガとオルガの持つスコップ、そして倒れ伏したチエスターを見比べ、ようやく事態を把握したのか、飛びつくようにして急いでチエスターを抱き起こした。

「だ、大丈夫ですかっ!？」

そんな彼女をちらりとも見ることなく、オルガは軽く睨みつけるような視線を、机を挟んで向こう側の男に送った。

「ところでそろそろ本題に入っただけませんか？ できれば兄さんが復活する前に」

淡々とした口調で提案するオルガ。その提案に同意したのか、それなりに愉快そうに成り行きを傍観していたクリステイアナは机の上の紙束を掴み上げ、オルガに向けて放り投げた。

「その場所？ 神隠し？ が起きている」

紙束の一枚目は地図だった。略図化された国土と海、国境線。一種の色彩の秩序をもって記されているそれらの均衡をぶち壊すように、赤字ででかでかと、広大な森林地帯が広がっているであろう地点に×印が描かれている。

「貴様ら三人で行ってなんとかしてこい」

クリステイアナの発言に、オルガは二重の意味でのあからさまな嫌悪をあらわにした。

一つはクリステイアナが？ 神隠し？ の意味を一向に説明しないことに対して、もう一つは彼が「三人で」と言った点に対してだ。

クリステイアナがこういう時に無駄に意地悪なのは別に今に始まったことではないので置いておくとしても、「三人で」という問題発言は無視するわけにはいかない。

オルガは何も言わないまま、目の前の女性に目を向ける。彼女の体つきは、先程チエスターが無駄な美辞麗句を用いて表現してみせた通り華奢であり、特別な訓練を受けた経験があるようにも見えな

い。つまるところを言えば足手まといだ。

彼女を同伴させることについてクリステイアナにどういった意図があるにせよ、無能な彼女を庇いつつ、終始彼女の存在に気を取られているであろう兄のフォローもしなければならぬことを思い、オルガは深いため息をついた。

「どうした、何か言いたそうな顔だな？ どうせ脳みその詰まっ
ない貴様のことだから大して意味もない馬鹿げたことだとは思
うが聞くだけ聞いてやろう言ってみる羽虫2号？」

「そうですねとりあえず？神隠し？とはどういったものなのか、愚
鈍なこのワタクシメにご教授願えないでしょうか？」

理不尽極まりない悪態を受けたのにも関わらず、なおも従順な態
度を崩さないオルガに対して、クリステイアナは片眉を吊り上げた。

「いやに素直だな」

「これ以上あなたの顔を見ていたくないので」

「素直にもほどがあるな」

「お褒めいただき光栄です、Sir」

テンポは良いのだが、どこか噛みあわない会話。互いに滲み出る
敵対心を隠そうともせず（クリステイアナはただの戯れとみなし
ているのかもしれないが）、二人は微笑みを用いて睨みあった。そ
して、意外なことに先に折れたのはクリステイアナだった。

「15人」

クリステイアナはそこで一度言葉を切り、オルガの持つ紙束に人
差し指を向ける。確認すると紙束のうち十数枚に、クリップで写真
が留められている。

「わずか一月足らずの間に、15人が次々と？神隠し？にあった」

「だから？神隠し？とはどういった現象なのか教えてくださらない
とあなたとは違って無教養な僕たちには理解できないと思われ……」

「あーあー要するに行方をくらませたっつーことだ」

「素直に連続失踪事件とさえばいいじゃないですか」

「その全員が若い女性でな」

「じゃあ連続婦女失踪事件ですねどうして？神隠し？だなんて回りくどい言い方をするんですか僕たちの困った顔が見たかつたんですか？」

「……おいそのゴミ羽虫」

「なんででしょう？」

きよとんとした顔で首を傾げるオルガ。

クリステイアナは頬杖をつきほとんど表情を変えないまま一息で、人の話は最後まで聞け。ついでにテメエはもう息をするな大気が汚れるだろう世界の皆さんに申し訳ないとは思わんのかこのゴミが

「Yes, Sir. お断りします。ところで一つよろしいでしょうか？」

「……なんだ？」

「あなたはどうかやら誤解なさっているようですが、僕たちは警察でも探偵でもましてやあなたのための便利屋でもありませんよ？」

暗にそのような面倒な事件に何故自分たちが関わらなければならないのか、という疑問。その答えは意外な方向から飛んできた。

「成虫が、目撃されたんです」

足元からの声に視線を落とす。兄を介抱しているあの女性と目が合う。

オルガとクリステイアナの注目を一度に集めてしまった彼女はあたふたと、

「あつすいません！ 口をはさんで」

「いや、ちようどいい。女、お前が説明しろ」

「ええっ!？」

ああ言えばこう言うオルガの相手をするのがいい加減面倒になったのだろうか、クリステイアナは説明をその女性に丸投げした。

指令を受けた彼女はしばしきよとんとしていたが、自分が説明を求められていることを悟ると、途端に目を輝かせた。

「じゃあ説明します！ 説明しますね!!! この私、全力で精一杯力の限り説明させていただきますも!!!」

彼女の中の何かよからぬものに火が付いてしまったのだろうか。メガネを一度強く押し上げると、これまでとは打って変わった生き生きとした表情で、彼女は意気揚々と説明を始めた。

「まず今回の連続失踪事件ですが、おそらく人間の仕業ではありません！ この写真を見てください！！」

どこからか取り出した写真をオルガの目の前に突きつける。彼女の異様なテンションに少々ドン引きしながらも、受け取るオルガ。写真に写っていたのは人影。ただしピントが全く合っておらず、被写体は本当に人の影としか認識できない。だが、普通の人間とは決定的に違う点、人間にはあるはずのないものの存在だけははっきりと確認できた。

「翅……」

眉をひそめ、オルガは呟く。

被写体の背中には翅が生えていた。それは天使像が持っているような鳥の翼ではない。トンボやカゲロウのような脈の入った透明な昆虫の翅。

「異原体重度感染者、通称？成虫？の目撃情報は？兎？の祠の近辺に集中しています。また、人知れず若者を森の中へと勾引かすという？兎？の伝承の内容とも一致します。よって今回の事件は？兎？による神隠しであると我々は結論付けました」

「……？兎？？」

オルガが聞き返すと、ウルは身を乗り出し、鼻息荒く答えた。

「はいそうです。？兎？の魔物です！ この地域の伝説で、森に人を誘い喰らってしまうとされている兎の魔物。といっても、所詮はおとぎ話の中の存在のはずだったんです。今回の事件が起きるまでは」

女性は写真をオルガの手から奪い取り、その写真にフェルトペンで直接描き込んでいく。耳が長い、獣？ おそらくは兎の絵だ。

ところで大丈夫なんだろうかあれは大事な証拠物件じゃないんだらうか。オルガのそんな心配をよそに、彼女は写真を左手にひらひ

らと持ちながら、話を続けた。

「非常に興味深い証言なのですが、現場近くで特徴の一致する白い兎が目撃されているそうなのです。しかし追いかけて捕まえようとしても不思議なことに一向に捕まらない。探してみてもどこにもいない。一瞬にして煙みたいになくなってしまふんです、まるで幽霊のようですね……」

「ごくり、と。唾を飲み込む音だけがやけに大きく響く。」

「と、状況は大体こんなものですが、何か質問はありますか？」

「はい」

教師に質問する生徒よろしく、オルガは右手を挙げた。

「なんででしょう？」

「……あなたの名前は何と言つんですか？」

What's your name? 教科書英語のような発音で、至極基礎的な疑問を問いかけるオルガ。

すると、それまで饒舌だった彼女の頬に僅かに朱が差す。メガネが元の位置にずり落ち、興奮し吊り上がっていた目も元通りの気弱な雰囲気に戻りしした。

「すつ、すいません名乗りもせずに……。私は、件の地域担当研究機関所属のサン＝ウルと申します。ええと、オルガさんと、……チエスターさん、ですよね……？」

ウルは、足元のチエスターにちらりと確認の視線を送る。対するチエスターもようやく傷も癒えてきたのか、床に転がったままぴくぴくと軽く痙攣する左手を挙げて答えた。

「さて、羽虫1号2号3号」

もう十分だと判断したのか、クリステイアナは椅子の上で踏ん返り返り、横柄な態度で声をかけた。

この場にあるクリステイアナ以外の人物は三人。チエスター、オルガ、そしてウル。

「……えっ私、3号？ 3号ですか!？」

人数を指差し確認していたウルだけが、その括りに自分も含まれ

ていることに気づき、素っ頓狂な声を上げて反応する。

「説明は以上だ。分かったらさっさと行って、虫は虫同士で仲良く共食いしてきやがれあわよくばそのまま三人全員帰ってくるな」

「ええっ、そんなっ!?!」

オルガ、チエスターとともに虫として数えられてしまい、その上帰ってくるなとまで言われてしまったことに衝撃を受けるウル。

しかし、彼女が何を思おうと関係ない。足手まといの彼女を置いていきさえすれば済む話なのだから。そんな、ある種の排他的な思考を抱きながら、オルガは軽く一礼をすると、退出しようとする返

し、
「ふ、ふざけんなよ……。だあれが行くかそんなところおおおお!!」

だがこの状況を悪化させる人物としては最高の配役である兄の怒声が、彼の計画を見事に妨害した。

幽鬼のごとくゆらりと立ち上がったチエスター。復活早々に大声で吠えたことにより、彼の視界はぐら、と大きく揺れ、再び座り込んでしまう。

「何故だ？ 存在自体がオカルトなテメエらには似合いな仕事だろうっ?」

「悪いがそーゆーオカルティックなことは信じない性質たちでねえ……!!」

どの口が言うんだらうどの口が、とオルガはとても言ってみたくなったが、すんでのところで踏みとどまった。これ以上事態をややくこしくしてこの部屋への滞在時間を長引かせるのは自分の精神衛生上よろしくないと判断したのだ。

まずは兄をどうにかして言いくるめて、この性悪男から引き離そう。そして、できればこのウルとかいう女性はここに置き去りにして、さっさと出発してしまおう。

そう決心したオルガは、クリスティアナと壮絶な舌戦を繰り広げている兄に声をかけようとした。が、

「大体よお！　なにが悲しくてわざわざオレたちがテメエの阿呆面見に来なきやなんねえんだよ、ああ！？」

「あの、兄さ……」

「しっかも今回はそーんなド田舎まで行ってこいだあ？　そんな女の子もいねえようなとこに誰が行くかこの万年引きこもりが！　そもそもこちとらテメエの声聞くだけで、反吐が出んだよこのカスが！！　死んで詫びろ！！」

「早く行……」

「つまりだなあ、テメエは死ね！　すぐ死ね！　さつさと死ね！

早急に逝去しろご臨終しろ！　可及的速やかにテメエの大好きな主の御許に還りやがれ！！」

その発言はことごとく兄の罵声に遮られ、オルガはむつと唇を尖らせる。だがやはりというかなんというかチエスターはオルガのそんな努力にも苦勞にも全く気付かない。

「お前もそう思うだろお、オルガ？」

「うん。兄さんはさつさと埋まればいいと思う」

「ほらな、オルガもこう言ってんじゃねえか」

全く噛み合わない会話。オルガはとうとう会話に加わることを断念したのか、壁にもたれて座り込んだ。

「奇遇だな。こちらも貴様が大嫌いだ。できればこの場からとは言わずこの世から消え去ってもらいたいものだな」

「おーおー消え去ってやるーじゃねえの！　もう二度と来るかよこんな場所！」

ずかずかと足音も荒く退出しようとするチエスター。このままでは本当にこの事件に関わらない事態になってしまう。だがとても面倒そうな案件ではあるので、自分は一向に構わない、むしろ万々歳なのだが。そんな不純な気持ちを抱きながら、オルガは兄の背中を追いかける。

蹴破るようにして戸を乱暴に開けるチエスター。そんな彼の背中目掛けて、クリスティアナは仕方ない、とでも言いたげな声色で、彼

を釣る餌を投げつけた。

「知ってつか、色惚け。田舎には美人が多たって話だ」

ぴくりと。今にもクリスティアナの視界から消え失せようとしていたチエスターの肩が跳ね上がる。

「攫われた奴らは、全員が美人だそうだぞ？」

びくびく。耳が反応する。その姿はさながら名前を呼ばれた犬猫

「あーあー、もったいないなあ？」

クリスティアナはわざとらしく溜息を吐いてみせる。

「女の子……美人……」

チエスターはうわ言のように呟く。心がぐらついているのが傍目にもよく分かる。

「確認されてるだけで被害者は15人もいる。よかったじゃないか
ハーレムが作り放題だぞ？」

「ハーレム……！！」

夢でも見ているような恍惚とした表情でチエスターは虚空をうつとりと見つめる。きっと彼の意識内では、キャツキャウフフな妄想が展開されていることだろう。

「よし決めたぞオルガ！ 俺は決めた！！」

チエスターは傍らの限りなく嫌そうな表情のオルガの肩を抱くと、遙か彼方の空を指差し、とても楽しそうに高らかに宣言した。

「いざ行かん！ 田舎美人のもとへーっ！！」

十

回想終了。

オルガは目の前で偉そうにふんぞり返るチエスターの馬鹿面（と言っても、彼ら兄弟の容貌は双子と見まがうほどに似通っているのだが）に、冷淡かつ簡潔な私見を叩きつけた。

「うん、兄さんは死ねばいいと思う」

「ハハハ、またまたあ。心にもないこと言っちゃってえー」

「死ね」

「ははあ。お兄ちゃんには分かるぞ？ お前、照れてるんだろお？」

「死ね」

「ははっ。照れるな照れるな。照れなくてもいいんだぜ、マイブラ

ザー？」

「死ね」

「照れ隠しの下手なやつだなあ、はっはっは……は」

言語体系が違うのだろうか。オルガがいくら罵声を浴びせようとチエスターは一向にへこたれることがない。それどころかチエスターは、女の子のいない悲しさを訴えながら、オルガに纏わりつきはじめた。

「……あ。ああそうだったここには女の子がいなんだうわああああ女の子お、女の子がいないよおーうわあああ足りないー寂しいー干からびるうーもうダメだ俺はもうダメだ助けてくれよオルガあー」

「へえ、よかったね」

「オルガまた耳が悪く……。ああ、オルガがいなくなった今、俺はこの先何を頼りにして生きていけばいいっていうんだ……。！せめて可愛い女の子がそばにいてくれるなら、俺はこれからもこの命を燃やし続けることができるっていうのに……。！！」

「そのまま燃え尽きればいいのに」

「いや、そうだよな、もう贅沢は言ってられねえよな。はは、もう女ならなんでもいいや……。女、女性、女子、女の子、彼女、淑女、悪女、熟女、老女、メス……」

さながら怪しげな儀式の呪文か呪詛であるかのように、女性を表わす名詞がチエスターの唇から次々と紡がれていく。

そんな兄の醜態を意識の外へと追い払うべく、すすす、と横にずらされていったオルガの視線は、ある一点でぴたりと停止した。

「あ」

「うん？」

そこにあつたのは白く長い耳に一對の赤い瞳。

一羽の真つ白な兎が、大木の陰から、用心深そうな瞳でこちらの様子をうかがっていた。

兄が息をのむ音がオルガの耳に届く。

「な、なんてこつた……」

オルガが振り返ると、口をポカンと開け、わなわなと震えるチェスターの姿があつた。

そこでオルガは首を傾げる。

はて。確かに今、兎といえば例の？オカルティックな存在？を連想させるものだろうが、兄はそこまでオカルトが駄目だっただろうか。

弟の疑問をよそに、チェスターは大きく息を吸うと

「あれはっ！　メス（女の子）じゃないかあああああっ！！」

一吠え。

森の中という非日常的な状況により抑圧され抑え込まれ鬱屈とした感情が言の葉に乗せられ、巨竜のごとき勢いで一気に吐き出された。

哀れにもその標的とされた白兎は怯えた様子で、文字通り脱兎のごとく、森のさらに奥深くへ向かつて逃亡。

「ああ、待っておくれよオレの可愛いマイバニー！！」

当然のごとくそのあとを追うチェスター。

恋の障害（という名の、罪もなき草花や木や虫たち）を蹴散らしながら、愛しの彼女を追いかけ追いかけて　突如として彼のその姿は掻き消えた。

正確には消えたわけではない。

チェスターが消えた地点に空く、草木でカモフラージュされていた深さ約1メートルほどの穴。その中へ転落したのだ。

ところが兄が予期せぬ事故に見舞われたというのにオルガは一切動じることはない。

何食わぬ顔で木の棒を拾い。打ち所が悪かったのか一時的に意識

が混濁している様子の兄を突つつく。

反応はない。

満足げにうんうんと頷き。何も言わないまま、積み上げてあった土を次々とすくっては穴の中（にいる兄に向かつて）投入していく。適当に土をかけ終わったところで、スコップの裏で、ぱんぱんと土を元通りにならし。

ふう、と息を吐きながら、清々しげな顔で汗をぬぐった。
が。

「……こおらオルガあ、こおの悪戯っ子さんめえー？」
がしり、と。

掴まれた足首。

ホラー映画さながらの形相で辛うじて地の底から這い出てきた兄を見て、オルガはあからさまに舌打ちした。

「チツ、浅かったか」

「オレのありがたあい女の子語りを聞かずにさつきから何をしてたかと思えばこんな罫を作っていたとはなあ……流石はオレの弟！
だがしかしこの程度の使い古された罫トラップではオレはやられんよマイブラザー、このパターンは今月に入ってもう五回目じゃないかハハハハハ！ オレを仕留めたくば最低限、この穴の中に致命的な何かを仕掛ける程度のことは……」

「分かった参考にするよ」

すぱりと会話を終わらせると、オルガは兄を土の中から引き上げることもせずスタスタと歩き始めた。

ちなみにチェスターの胸から下は完全に土に埋まっており、一人で脱出することはまず不可能。

「えちよつとオルガ？ オルガー！？ それはないんじゃないかな、オレ動けないんだけど！？ 周りに誰もいないんだけどすごくピンチなんだけど緊急事態なんだけど！？ エマージェンシー！ エマージェンシーいいいいー！！」

受取人不在の空しい叫びを、傾きかけた太陽だけが聞いていた。

「どれくらい待てば骨になるのかな……」

誰にともなく、オルガはぼつりと呟いた。その言葉の示すところは勿論例の兄の事だ。

「……もうこの際ミイラでもいいかなー」

一つ一つが若干の悪意に満ち満ちている独り言を森に聞かせながら、オルガは歩みを進めていく。

当面の目標地点は、件の兎が祀られているという祠。全く頼りにならない地図を頼りにしているはずなのだが、その歩調には全く迷いが無い。だが、だからといってその道が合っているわけではないのだが。

「15分、30分？ 1時間、3時間、半日、もっとかな……？」
いつ起こるか分からない白骨化を待っている間、どこで何をしながら時間をつぶそうか。と、わくわくと心躍らせながら、呑気な空想にふけるオルガ。

ここはやっぱりさっさと仕事を終わらせて探索にでも……もしかして新作の……いや、万が一兄さんが抜け出してきた時のために……ん？」

枝が踏み折られる音。後方から響いたその音に振り返る。

小さな高台の木の陰に垣間見えた影。

無害な小動物にしては大きすぎる。猛獣か何かか？ それともまさか兄さんか？

もし猛獣なら殴り倒そう。もし兄さんでも殴り倒そう。そう心の内で決め、スコップの柄を握り直す。

微かな悲鳴。

茂みの向こうから滑り落ちるようにして現れ出た小さな姿。

「？」

オルガは小首を傾げた。

十

逃げられない、絶対に。

そう確信しながらも、少年は走り続けていた。

目の前には踏みならされた黒い土の道。一直線に続く道。森の外へと続く道。

だが、彼がいくら走っても、決して森の外へは辿り着くことはできない。

まるで邪悪な？何か？が、彼の邪魔をしているかのように。帰れ、と警告しているかのように。

帰る。どこに。

帰るんだ。森の外に。

しかし、少年の頭をかすめる風景。

小さな祠。月光。兔。そして、真っ白な彼女。

彼女の唇が動く。呼び止められた気がして立ち止まる。

振り返る。彼女はいない。ただ黒い道が続いているだけだ。

でも、彼女はそこにいる気がする。黒い道の先で、ずっと、待つ

ている。あの祠の前。白色。月の下。彼女はずっと待っている。僕

は彼女を呼ぶ。彼女は振り返り、少しはにかみながら、手を広げて、

****と

「違う」

首をぶんぶんとして振って、彼女たちを追い払う。

違う。違う違う。

あの場所じゃない。僕が帰るのはあの場所じゃない。

帰らなきゃ。早く、早く。

足を踏み出す。

「うわっ」

不意に足がもつれる。足元には小さな崖。

バランスを崩した少年の体は、そのまま斜面を転げ落ち。茂みの中へと頭からダイブ。その中へすっばりとはまってしまった。

不幸にも少年を包み込む折り重なった枝は少年の体重を支えるだけの強度を持っており、しかし一本一本はとても細く支えにすることもできない。結果として彼の体は、見事に宙に浮かぶ形に。

慌てて手足をバタつかせ、もがいてみるが、状況は変わらない。起き上がるうにも足は宙に浮かんでしまっている。支えにしようとして枝を掴んでも、折れてしまう。ならばと地面に手を伸ばしてみても届かない。少年の努力をあざ笑うように、少年がもがけばもがくほど、鋭い枝は彼の肌に細かい傷を作っていく。

やがて、彼はびたりと動きを止めた。

俯く。その目には見る見るうちに涙がたまっていく。逃げられない。何をどうしても絶対に逃げられない。この森から、逃げることはできない。その事実と、この状況の情けなさに少年は肩を震わせた。

不意に。

「その少年」

頭上から落ちてきた声。

少年は見上げる。

最初に見えたのは黒い瞳。次に見えたのは四方に跳ねた黒髪。少年の顔を覗きこむような形で、一人の青年が座り込んでいた。

人、だ。この森の中であの少女以外の人は初めて見た。これで、帰れるかもしれない。少年の胸の内に安堵のようなものが広がっていく。

彼は珍しい動物でも見るような目で少年を観察していたが、やがて口を開き、

「人間ってどれくらいで骨になるのかな？」

「……え？」

予想外の言葉に、涙も一気に引っ込んだ。ただただ目を丸くして、

青年を見つめる。

青年は口を軽く押さえ、「あ、間違えた」と口の中で呟くと、しばし考え込み、

「……それ、楽しいの？」

少年の状況を指差しながら訊ねた。少年の状況、つまり茂みの中で引っかかり宙ぶらりんの状態。好きでそんな格好になった訳ではないということは一目見れば分かりそうなものだが。

ぼかんと口を開けて答えることができないでいる少年を見、「ん、これも違うか」と青年は再び考え始める。金属の鋤で軽く口元を隠しながら、しばらく逡巡していたが、やがて。

「まあいいや」

考えることをあっさりと放棄した。

「じゃあね、少年。頑張つて」

ひらひらつと手を振りながら立ち去っていく青年。

少年は暫し啞然としていたが、

「ま、待って！ 待ってよ！！」

手足を精一杯動かしながら、必死になって呼びとめた。鋭い枝が肌に刺さるが構っていられない。

「何？」

「ぼ、僕、逃げてきて……。でも逃げれなくて……。何度も同じところを……。それで、それでえっと……」

いまいち要領を得ない少年の説明。青年は興味のなさそうな眼で一瞥すると、

「ふーん」

すたすたと歩き去ろうとする。

「待って！ 置いてかないで！！ 僕はもうあの祠には戻りたくないんだっ……！！」

祠。

その単語が青年の足を引きとめる。ぴたりと立ち止まった彼は振り返り引き返し、その単語を聞き返す。

「祠？」

言われている意味がよく分からないのか、急に踵を返して戻ってきた青年に驚いているのか、少年は答えない。青年はもう一度繰り返す。

「少年、祠から来たの？」

戸惑ったような表情ではあるが、こくり、と。首肯。

途端、青年の眼光が鋭くなる。

「この森に住んでるの？」

首を横に振る少年。否定の意味だ。

「……少年、もしかして？神隠された？子？」

無理のある造語を用いて青年は訊ねたが、少年が反応できるはずもなく。

「え、え……？」

戸惑いの声を上げる少年。睨みつけるような目で少年を観察する青年。

沈黙。ただただ沈黙。

不意に、呟くように青年は尋ねる。

「名前は？」

「……え」

「少年、名前は？」

「あ、え、えっと」

彼は慌てて答えようと口を開き 急にのどが貼りついてしまったかのように、声が出せなくなった。

まるで金魚のように口をぱくぱくとさせる少年。声を出そうとしても喉を通りぬけた空気が音を成さないまま漏れるだけだ。

困り果てて青年を見上げる。

「……ん？ 僕はオルガ。君は？」

自分の名前を聞かれたのかと思ったのか、自身を指差しながら名乗る青年。だが少年は答えることができない。

「僕、は」

少年は懸命に声を出そうと口を動かす。だが口からは呻くような声しか出てこない。

そして少年は、はたと気がついた。とてもとても単純な事実だ。僕は、自分の名前が分からないんだ。知っているはずなのに。名前なんて当たり前のように知っているのと、無意識のうちに思ってたのに。

「家族は？ 住所は？ 家がどこにあるか分かる？」

立て続けに投げかけられる質問。しかし、そのどれにも彼は答えることができない。

「少年」

この上なく冷静な、オルガと名乗った青年の声色。だが、その意思のあるなしに関わらず、少年を問い詰めるような響きで彼に襲いかかってくる。

なんとかして答えようとするほどに混乱してゆく思考の海。涙が、ぼろぼろと目の端から零れていく。

「わ、わかんなく……」

とめどなく溢れ、地面へと落ちていく雫。地へと落ちた滴は、吸い込まれ、面積を広げていく。だが、何も分からない。自分の名前すら思い出せない。

それでも、ただ一つだけ。ぼつんと取り残された想い。

「帰りたいよあつ……」

自分が誰なのかも分からない。どこに帰ればいいのかも分からない。

でも、帰りたい帰らなきゃ。帰らなきゃいけないんだ。

そんな正体不明の使命感。それだけに、少年は縋っていた。

涙は、止まらない。

「……」

何の前触れもなく唐突に、少年の頭の上に、ぼんつと乗せられた手。包み込むような手。

「分かった」

単調なオルガの声。少年は首を上げ、見上げる。

「分かった」

少年を安心させるかのように、彼の目を見ながらオルガは再度言う。一度目の時よりも、声も表情も幾分か真剣な色が込められている、ように少年は感じた。

帰れる。帰ることができる。

ゆっくりと、その事実を飲み込んでいく。胸の奥にあたたかいたのが染み込んでいく。

これで本当に助かるんだ。この森から、出ることができる。僕はやっと、帰れるんだ。

その途端。ぼろぼろと。安堵で涙腺が緩んでしまったのか、堰を切ったように溢れてくる大粒の涙。その衝動を止めることができず、少年は何度もしゃくりあげる。

だがオルガの次の一言で、その幻想は粉々に砕け散った。

「じゃあ案内して」

「うえっ……？」

何を言われたのか分からず目を丸くする少年。涙でぐしゃぐしゃになった顔が、オルガに向けられる。

「祠まで。案内して」

少年は文字通り絶句した。

だからその祠から逃げてきたのだと言っているのに彼は何を聞いていたのだろうか何も聞いていなかったのだろうか。それとも単に驚異的なまでに無神経なのだろうか。

少年は口をパクパクとさせ、彼に対して何を言ったらいいのかわ探す。

だがオルガは少年をひよい、と片腕で抱き上げ。

「行ってみないことには分からないから」

「はっ、離し……っ」

肩の上に担ぎ上げて。

「じゃあ行こうか」

「いやだあ！ 離せつ離せえ……！！！」
少年の泣き叫ぶ声、華麗に無視された精一杯の意思表示は、真夜中の森に木霊となって響き渡った。

十

雲上の月は、上りきっていた。
だが、彼は未だに埋まっていた。

「オルガーまだ戻ってこないのか？ もう日も暮れちまったぞー。
なあーオルガーおい……」

情けない声で弟を呼ぶチエスター。だがその声は森の中に吸い込まれていくだけで、目的の人物に届いている様子はない。チエスターはがつくりと肩を落とした。
と、その時、彼方より響き来る悲鳴。
チエスターの肩が跳ね上がる。

「な、なんだつ……！？ いやつ、怖がつてるわけじゃないんだぜ？ 全然怖くねえよ全つ然！ たとえこんなオカルティックな場所に一人置き去りにされたとしてもだなあ！ あーくそ、オルガどうしてオレを置いていつちまったんだよ……。やつ、全つ然怖くならないけどな！！！」

地中に放置されたチエスターは、夜風に乗って届いてしまった悲鳴のような何かに過剰反応を示した。だが、その反応を嘲笑う者も、相槌を入れてくれる者も今ここにはいない。

チエスターは一度大きく身震いすると、恐怖を押し隠すかのように、下を向き一心不乱に砂を掻き分け始めた。

「ちくしょーオルガめ……。今度一回びしつと言ってやらなきゃなこう……びしつと！ ……しっかしそれにしてもなんだこれ、どんな力で固めたらこんな重さになるんだよ訳わかんねえ、はつまさかこれセメントか？ セメントなのか！？」

「あ、あのー……」

声。鈴を転がしたような、可愛い、声。

可愛い　女の子の声!?

反射的にガバツと顔を上げる。途端に生気を得た瞳が、目標を捕らえる(ターゲットロックオン)。

途端、彼の視界に飛び込んできたのは目も眩むほどの白色。大木に半ば隠れるようにして、チェスターの様子を窺っていたのは。

白装束の、少女。

静かな夜だ。オルガは思った。

鳥や獣の声はおるか、虫の羽音一つ聞こえない。

静かだ。静かすぎる。何の音も聞こえない。

時折、すっかり抵抗する気力をなくしてしまった肩の上の少年が、小さくしゃくりあげる声以外は。

「少年」

オルガは声をかける。

「なんで泣いてるの？」

とても不思議そうに、眉を八の字にしながら。

この人は本当に理解できていなかったのだという事実には愕然としながらも、少年は懸命に説明した。

「ぼ、僕、祠から、に、逃げてきたのに……ま、また、祠に、行くのっ、やだっ……!!」

「あ。そうだったんだ。ごめんね」

素直に謝るオルガ。

「だ、だからっ、降ろして……」

「それはだめ」

無情な返答に、少年は肩をふるふると震わせる。再び涙が零れてしまうまでのカウントダウンは開始された。

急に黙ってしまった少年の様子に首を傾けながらも、オルガは歩みを止めない。

と、その時、彼の耳が聞き取った小さな声。「あっ」と、誰かが驚いたような声。見やると彼方に、驚愕の表情を浮かべながら立ち尽くす女性の姿。

「オ、オルガさんー！」

駆け寄ってくる。どうやら自分とは知り合いであるようだ。

誰だろうっ？

オルガは真剣に考え込んだ。
白衣。大きな丸眼鏡をかけている。髪は茶色。つい最近会ったよ
うな……。

記憶の底をさらって、ようやく思い出す。大して興味もなかった
のですっかり忘れていた。あの時の一緒についてくるはずだった女
性。名前は確か、ウルだ。

追いついてきたウルは、せえせえと肩で息をしながら、

「や、やっと見つけましたよ……。どうして置いていっちゃうん
ゆ、誘拐犯!？」

謂れない罪を着せてきた。

確かに、見ず知らずの少年を荷物のように担ぎ上げ、当事者のそ
の少年は泣きじゃくっているというこの図は、傍から見ればただの
誘拐犯にしか見えないだろうが、それはあまりにあんまりな反応じ
やなかるうか。

オルガはあからさまに不機嫌そうに眉を寄せた。

「ち、ちよつとオルガさん！ 一体どこから誘拐してきたんですか
!？」

「誘拐じゃない。保護」

「誘拐犯はみんなそう言うんですっ！」

「や、やつぱり僕、誘拐、されたんだっ……」

ぐすぐすと鼻を鳴らす少年。ウルは慌てて、オルガの肩の上から
少年を奪い取った。

「と、とにかく、渡してくださいっ！」

大人しくウルの腕の中に収まる少年。無事地面に下ろされる。

「大丈夫ですか？ 怖くなかったですか？」

ちゃんと少年に目線を合わせ、常識的な言動をとる女性に、少年
は、はしつとしがみついた。この人ならきつと、森の外に逃がして
くれる。

「あ、あの、僕、祠に、捕まってて、それでっ、逃げただけど、
訳分からないまま、この人に連れてこられてっ……、祠に行くって

この人がっ……!」

「……えーっと、もしかして何も聞いていないんですか？」

ウルは目をぱちくりとさせながら。

「今この森がどんな状況なのかも、何も？」

ずいっと迫るウル。少し怯えながらも少年は首を縦に振った。それが間違いだったのだろう。

「ならば私が説明しましょう!」

ウルはメガネをぐいっと押し上げ、興奮した面持ちで宣言した。

彼女のメガネの端がキラーンと輝いたのは気のせいだろうか。

「まず私の名前はウル。こちらの方はオルガさんといいます。私たちがここに来た理由は、今この森に？成虫？、ええとつまり吸血鬼がいるからなんです」

「きゅうけつき……?」

「人の血を吸い、食べてしまう化物のことです」

「た、食べっ……!?!」

その単語に、少年の顔色が変わる。

「で、その？成虫？はですね……」

荷物の中をごそごと探り、何かを探し出そうとする。

「ああ。これ。これです」

透明な筒に入った液体。赤色の血をさらに凝縮したかのような禍々しい深紅。禁忌を思わせる色合いに、少年は目を奪われた。

「奴らは噛みついた時に対象に微量のこの物体 私は？異源体？と呼んでいます、とにかくこの物体を注入するんです。すると、噛まれた相手はゆっくりと時間をかけて、彼らと同じ化物？成虫？になってしまう」

少年は恐れ慄き、すぐ横にあったオルガの服の裾をぎゅっと掴んだ。

「そ、そんなのが、この、森に……?」

「はい、しかもかなりの数が」

服を掴まれたオルガは、無表情のまま、少年へと視線を向ける。

少年は慌てて服から手を離した。

「あなたはラッキーでしたよ。もし、私たちに保護されていなければ、今頃は食べられてしまっていたかもしれません」

「そ、そんな、じゃあ早く逃げないといけないんじゃない……！」

「大丈夫ですよ、そのために私たち、退治の専門家が来ているんですから！ それにチエスターさんが」

そこまで言つて、あれ？ とウルは首をひねる。きよるきよると辺りを見回す。目的の人物はいない。

「あ、あの、オルガさん。チエスターさんはどちらに……？」

「埋めてきた」

「……は？」

目を点にするウル。そんな彼女に対してオルガは、至極冷静にもう一度。

「埋めてきた」

「う、埋めてきたつて……」

「だって、兄さんが落とす穴に落ちるから」

「だからつて埋めつ、死んだらどうするんですかー!？」

「……死なないよ。多分。死なない。死んでくれたら、少し嬉しいけど」

淡々と本音を述べるオルガ。根本的に会話が噛み合っていない。

「そういう問題じゃないです!!! い、今すぐ掘り返してきてくださいーつ……」

「……えー」

限りなくめんどくさそうな声で答える。だがウルは責めるような真つ直ぐな視線に、渋々、オルガは兄を掘り返すべく、踵を返した。その後ろ姿は、木々の向こう側へと消えていく。

ウルは、もつつ、と息子の世話を焼く母親のように息を吐き、そして、ふと気付いたかのように「あ」と声を上げ、振り返った。

「そつういえば……その祠に捕まっていたのはあなた一人だったんですか？」

「……え？」

「他にその祠に人はいなかったんですか？」

僕の他に。祠に。

脳裏に浮かぶ白い少女の姿。

「先程説明したように、今、この森は危険なんです。だから他に誰かいるのなら早く一緒に逃げてもらわないともしかしたら？成虫？に襲われて」

言葉の続きがうまく聞き取れない。そんな、まさか、と心臓が暴れまわる。

まさか。まさかあの子が、危ない？

顔から血の気が引いていく。

あの子は一人だ。ずっと一人だ。あの祠の前ですっと独りぼつちだ。守ってくれる人なんていない。なのに。僕は。あの子を置いてきてしまった？

「行かなきゃ……！！」

少年は無我夢中で駆け出した。

十

兄を掘り返すという重要任務を受けたオルガは、物騒極まりない単語を指折り数えていた。

「火責め、水責め、針、剣、槍……うん。やっぱりお手頃に槍かな……」

めくるめく妄想を膨らませながら、自分が祠に至るまでに歩いてきたと思われる道をオルガは進んでいく。

その足取りはとても軽く、よもや本当にとどめを刺そうとしているのではないかと疑いたくなるほどに、上機嫌だ。

と、開ける視界。見覚えのある風景。僅かに残る積み上げられた土。確かこの辺りじゃなかったかな、と首を巡らせる。

だがそこにあったのは、不自然に地面にぽっかりと開く大穴だけ。

「……あれ？」

彼が確かに埋めたはずの兄の姿は、消え失せていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167s/>

月の森と兎の祠

2011年8月21日03時32分発行